虱の歌

――『一乗拾玉抄』所引和歌攷――

中野　真麻理

要　旨　虱を主人公とする御伽草子『白身坊』からは千手観音信仰の反映が看取される。中世『法華経』注釈書は虱を詠み込んだ道歌を書き留めており、これらが伝承されてゆく過程と、『白身坊』成立の過程とは重なり合うと思われる。一橋田安家旧蔵の番外謡曲集には「白身」と題する曲が収録された。その構成は『白身坊』と酷似する。

他方、松島瑞厳寺の中興として知られる雲居希庸は『雲居上人往生要歌』を残した。そこには、虱と書写寺とを詠んだ道歌が見出される。蓋し、性空上人説話を踏まえた一首であろう。『一乗拾玉抄』は六根浄の人として性空・安然など高僧の名を列挙した。上総国道脇寺の伝承に安然の名が付会されたのは、この六根浄の徳によると考えられる。

一

青森県五戸町には「のみと虱の位取り」という昔話が伝えられている。

昔、あるところの殿様が、蚤と虱を呼んで、二人に、神様のところへ行って位を取って来い。そうしたらお前たちに扶持をやると仰せになった。二人は出かけることにしたが、蚤は、どうせ虱はのろのろしているから負ける心配がないと思って、神様まで行く途中昼寝をしたり芝居だの角力だのを見て遊んで、時々ひょんひょんと跳ねて行った。虱は歩むことが遅いので、朝暗い中から出かけ、神様から位を貰って殿様のところへ行った。殿様は、虱は早く位を貰ってきたから、首九万石と腹八万石を扶持すると申された。蚤は遊んでいてとうとう虱に敗けて遅く帰ったので、殿様は、蚤はからやきだから、尻四万石と脛四万石をくれると仰せになって、虱にまけた。それから虱は頭と体の胴とにいるようになったし、のみは腰と脛の方にばかりいるようになったという。

（能田多代子編『手っきり姉さま―五戸の昔話―』）

動作が緩慢な虱は、人に見つかると簡単に潰されてしまう。『日本方言大辞典』「虱」の項には別称「ぷっちん」が挙げられているが、これは虱が捻り潰される際の語感による命名であろう。太田全斎『俚言集覧』「ぽッしり」の項目を参照してみたい。

ぽッしり　半濁、物をつぶす聲又ポッチリとも云［白身坊］シラミほど出家を好む物ハあらじ殺されながらホッシとぞなる

ここに引かれた［白身坊］所載の和歌は、「虱」を意味する方言「ぷっちん」と相通ずるものといえよう。「物をつ

ぶす聲」ホツシと法師とを掛け、笑いを誘う。

御伽草子『白身坊』については未だ版本の所在が確認されておらず、太田全斎披見の『白身坊』がどのような本文であったのかは定かでない。昭和三十八年、堤精二氏によって国立国会図書館所蔵の写本『白身坊』が取り上げられ、既に寛文年間（一六六一～一六七二）刊の『和漢書籍目録』「舞并草紙」の項に「白身房」と見える由が報告された。これに続き、藤井隆氏は室町古写本の存在を紹介されている。

国立国会図書館蔵『白身坊』の題箋には『千手観音物語』と墨書、表紙見返しには、

是時文久二稔戌仲秋廿日あまり八日の事になむ

此書素表題なし、其作意無情をむねにて書なせし様なれば、虱の一名を千手観音ともいへば、勿体なくも仏の御名を仮り、題して千手観音物語と表題なすことしかり、

斯しるすは

松裏亭主人

とある。『千手観音物語』の題は文久二年（一八六二）に付けられたと推測される。

この作品は、「歩むことが遅い」虱がはかない恋に破れて発心し、諸国修行の旅に出る物語である。なぜ、「千手観音物語」の名が冠せられたのであろうか。虱の行脚のあとを辿ってみよう。(1)

二

いつ頃のことであったか、鎌倉建長寺の僧堂の乾の角に、齢八十四、五歳の虱が一匹、座禅を組んで暮らしていた。

ある日、虱は人恋しく、誰かに食い付きたいものだと思いつつ、そぞろ歩きをしていた。そこへ、当山第一の喝食様が現れた。肌は雪のよう、光源氏も遥かに及ばない美しさである。虱は一目で心を奪われた。早速、腰の辺りにしっかりと食い付いたが、さらりと手で払いのけられて転がり落ちてしまった。虱は目もくれ、心も乱れ、畳の縁によろぼい出たが、余りにも名残が惜しまれる。

しかし、喝食様は師匠に呼ばれ、座を立ってしまわれた。手足の数には事欠かない虱ではあるが、こうなってはもはや追い付く術とてない。「いかなる爪の上にても生害せばや」と思い詰めたけれども、ふと、思い返した。自分はこのまま虱として輪廻し、無量劫を経るのであろうか。古い歌にも、

世の中にひとり留るものあらば　もしわれかはと身をや頼ん

と詠まれているではないか。かれこれ思い合わせ、発心した虱は、破れた菅笠を打ち掛けてよろよろと諸国修行の旅に出立した。

虱はやがて三島明神へ到着した。鰐口をちょうちょうと打ち鳴らし、諸願成就子孫繁昌を祈った。その夜、拝殿に籠りながらしみじみと考えるに、虱とはいかにも拙い名である。発心修行の身に相応しい名が欲しい。生まれ付き身も白いのであるから、「白身坊」と名乗ってはどうだろう。自問自答に打ち頷き、真摯な求道者「白身坊」は歌を詠じた。

幾度か思ひ定てかはるらん　頼まじきは心なりけり

さて、思い切ったはずではあるが、故郷に残してきた妻虱や子虱のことがしきりに思い出される。だが、柳緑花紅、何事も自然の道理と観念し、虱はまた歌を詠んだ。そのうちの一首。

つくづくと生れぬ先の身をしれば　恋しかるべき父母もなし

さらに、富士を眺めながら、

富士の霧霞の衣綻びて　雪の肌ぞ顕れにける

と詠じていると、[2] 行脚の僧と思しき六十ばかりの痩せこけた僧が現れた。僧は虱を見るなり、「ゑひ、おのれめはいづくより何かたへ行ぞ」と問い掛けた。虱は「むか」と腹を立て、いきなり「ゑひ、おのれめ」とは何事かと怒った。しかし、老僧に「己が手足多く、腹は大につたなげなる身の、色のなま白きは、正敷、虱僧にてはなきか」と見破られ、大いに恥じ入った。虱と僧は様々に問答を交わした。僧は「多くの虱に喰れつれ共、かやうに一問などしたる虱は終になし」と不思議に思い、歌を詠みかけた。

腰わきや肩せを廻る旅しらみ　ふところしまや泊りなるらん

虱はにっこりと笑って、「仏道にも歌道にも劣申まじ」と返歌をした。

会下僧の人目ばかりの薄衣　染し心の裏はしらぬの

僧又かくなん

世の中の虱を喰ふものもがな　我身のかゆさ思ひしらせん

白身かへし

よの中に人をもひねる物もがな　我身のいたさ思ひしらせん

又僧

世の中にたへて虱のなかりせば　人の心はのどけからまし

白身返し

人にたゞ爪の甲だになかりせば　虱の心のどけからまし

又僧

虱めが盗ぐらひの身の果は爪の上こそ墓どころなれ

白身返し

しらみほど出家をこのむものはあらじ　殺されながらほつしとぞなる

又僧

さてこりよ我を衣のやせしらみ　人にそはねばかつへこそすれ

水掛け論のような応答に虱はすっかり閉口し、口を噤んでもぞもぞと動いていた。この様子を見た僧は、「不便の体かな、既末期に及候とみへたり、西に向て往生せよ、一句をも示さん」と言った。虱は辞世を詠み、とうとう往生の素懐を遂げた。(3)

分上る麓の道は多けれど　おなじ雲井の月をこそ見れ

古郷にのこし置たる子虱の成行末をいかゞとぞ思ふ

この後、物語は「親の子を思う心は虫けら虱に至るまで変わるものではない」と述べ、「此一巻一覧の人々一返の御回向に可預也、穴賢々々」と結ばれる。

『白身坊』の作者は、『伊勢物語』『源氏物語』をはじめ、諸書に見える名歌やそれを捩った狂歌三十余首を活用、虱と僧とのやりとりに筆の大半を費やした。しかし、果たして、『白身坊』の面白さは、そうした言葉遊びのみにあったのだろうか。

虱は自ら「しらみほど出家をこのむものはあらじ」と詠んだ。けれども、僧と虱との組み合わせは『白身坊』独自の着想ではなかったと思われる。中世の天台宗談義所内では、一首の道歌が伝承されていた。

一諸漏已盡ヨリ下五句ハ上ノ三徳ヲ歎也、……如レ此不(シバ)レ云何度モ不審難(シ)レ晴被(レケル)レ申也、殊勝ニ覺リ、
歌云　坐禅スル衾ノ上ノ痩虱　空ト思フモ障ナリケリ
（『法華経鷲林拾葉鈔』巻一序品「廿九　諸漏已盡無復煩悩事」）

殺賊ト者九十八使ノ煩悩ヲ断ズル故也、惣ジテ煩悩ノ盗人ヲ殺也、……或ル哥ニ、
座禅スル衾ノ下ノヤセシラミ　空ト思フモサハリナリケリ
（金台院本『法華経直談鈔』巻第一上序品）

右の歌は「白身坊」を彷彿させる。このような道歌が談義の場で伝えられてゆく過程と、『白身坊』成立の過程とは重なり合っていたと考える。例えば、先出『白身坊』所引の四首、

世の中にひとり留るものあらば　もしわれかはと身をや頼ん
幾度か思ひ定てかはるらん　頼まじきは心なりけり
つく〳〵と生れぬ先の身を知れば　恋しかるべき父母もなし
分上る麓の道は多けれど　おなじ雲井の月をこそ見れ

は、それぞれ中世『法華経』注釈書が引く道歌に一致する。(4)

虱は、外見の類似性から、異名を「千手観音」という。天文九年（一五四〇）の『守武千句』には、次のような句が詠まれている。

しげひら貝をふかれぬるなり
風呂に入せんしゆのまへのかゆくして
かれたる木をもたゞたけやたけ

このほか、元文四年（一七三九）初演の『平仮名盛衰記』などに、虱を千手観音と呼んだ例を拾うことができる。(5)

千手観音は六観音の一つである。一切衆生を利益するために千手千眼を具足し、餓鬼道や天道に配される。この尊を本尊として、敬愛・息災などの為に修せられる法を千手観音法・千手法と称する。諸鬼の難を逃れることを得、夫婦和合・難産などに効験ありと信ぜられた。(6)

千手観音に関連する経典のうち、最も有名なそれは「千手経」、即ち『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』であろう。密教のみならず、禅宗でも誦持する経である。『白身坊』の主人公が「禅刹建長寺の虱」であったのは偶然ではない。

とりわけ、千手観音の功徳のうち、虫毒に関する効験が挙げられていることに注目したい。『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』は、同経の誦持者は十五種の善生を得ると説く。その第九番目は「不爲蟲毒害死」であり、経中に繰り返し記されている。

観世音菩薩復爲誦持者。説消除災禍清涼之偈。……若入野道蟲毒家。飲食有藥欲相害。至誠稱誦大悲呪　毒藥變成甘露漿。

若爲蟲毒所害者取藥刼布羅　龍脳香也　和拙具羅香。各等分。以井華水一升。和煎取一升。於千眼像前呪一百八遍。服即差。

（『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』）

（同右）

また、『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌経』によれば、悪獣虫狼師子怨敵悪人などに害されなんとした際、千手の法を行えば、その難から逃れられるという。

及諸悪獣蟲狼師子怨敵悪人欲相損害者。如是等類作此法時。彼等起悪心者。如有覺觸身心不安。　（下巻）

『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経』も「汝輩鬼神應知此呪。……藥毒蟲毒邪悪人等。復能摧伏三十三天悉令順從」と説く。『千手千眼観世音菩薩治病合藥経』では、「若有人等被虫食田苗及五菓子者。取浄灰砂。呪一千八遍。散田四

邊。虫退散也」と記載される。即ち、千手陀羅尼を誦すれば、田畑を荒らす害虫も退散するとの信仰が行われていた。

これらの経説は中世の抄物にも受け継がれた。『行林抄』第二十六「千手下」は右とほぼ等しい説を引く。(7)

又云。若有被虫食田苗及五菓子者。取浄灰沙。呪一千八百遍。散田四邊。虫即退散也。菓樹兼呪水。灑著樹上。虫不散食果也。

又云。得十五種善生。不受十五悪死也。……九者不爲蟲毒害死。……補陀落山文。述秘云。……猛獣毒虫相視而無害。皆聞法音同含慈悲。

また、明恵上人の著作『千手経述秘抄』(寛文八年版)を繙くと、千手観音の持物に関して次のように記載されている。

経曰、為除二身上悪障難一者當レ於二白拂ノ手一、釋曰、第十三ノ手白拂者國王長者ノ取二執左手一拂二蚊蠅等ヲ器也、観音本願慈悲薫(シテ)二王三昧一執二持白拂一表レ拂二一切衆生ノ障難者欲レ成二就此ノ法一者作二一ノ白拂一安二置本尊ノ前、観二手相一呪一百八返、以觸身除二諸障難辟如下白拂ノ掃二除塵穢一ヲ、散中除蚊蠅等上ヲ如二経言一、不下為邪神悪鬼得レ便死上欲レ得二此ノ利一當レ於二此ノ手一、

一方、「白身坊」は、一命に関わる程の悪虫ではないにせよ、人々に忌み嫌われる害虫の身であった。虱自身、次のように述懐している。

又つく〳〵物を案ずるに、此年月いか程の人の肌をかぶり喰し、後のよの罪の程ぞ怕し、　(『白身坊』)

本来、「千手観音」は一切衆生を虫毒から救済する菩薩であった。その名を異名に持ちながら、「人にそはねばかつへこそす」る虱は、人に食い付いては捻り潰され、「爪の上こそ墓どころな」る宿命を負っていた。

さらに、『渓嵐拾葉集』巻第二十六「六観音法事　私苗」は、白色を以て千手観音を彩色する由を述べる。

千手法第一　……軌云。彼像式云。式納或素示云素ト云ハ隨處可二隨意一歟。此ハ何トモ不二得意一。墨像モ又薄タミトモ云フ白ト云事也。私云。素ト云事ハ。凡白色ノ本尊ト云事也。例證多也。覺大師御相承ノ白色ノ不動ハ素本尊ト云也。

虱は、我が身の白さから「白身坊」と名乗った。そこには、こうした曼陀羅図の千手観音像からの連想も働いていたのではなかろうか。

虫毒の元凶である千手観音こと虱と、千手陀羅尼など熟知しているであろう僧侶との掛け合い。『白身坊』の面白さは、登場者の取り合わせの妙にあった。

三

一橋田安家旧蔵、鴻山文庫現蔵の番外謡曲集の中には、「白身」と題する一曲がある。曲名の下には小さく「虱トモ」と書入れがなされている。以下、本文を参照してみたい。

白身虱トモ

[次第] 日も暮方に旅立て〳〵、明ぬ先にと急ぐ也、

[ことバ] 抑我出生を尋ぬるに、いか成者共知ず、只白身と申沙門にて候、然るに有為轉變の分野ハ、あぢき無世にあぢきなく、はかなき物ハ我身と思ひ、すミの衣をまとひ、諸国執行に出候、

[下] 吹風に散行花の色よりも、猶あだ成ハ命ぞと詠つゞけて行程に、

[上] 世の中ハ只浮嶋が原に来て〳〵、田子の浦波打ミれバ蜑の塩焼煙さへ空にのぼるか富士の山、実や時しらぬ、

詠を今ぞ駿河也と、心をすまし暫くすそ野に休ミ居たりけり〳〵、

［わき一セイ］面白や、霞の衣ほころびて、雪のはだへの、富士こそハミれ、

［ことバ］いかに御僧、御身はいづくよりいづ方へ行給ふぞ、

［して］是ハ諸国修行の僧にて候、扨御身ハいか成人ぞ、

［わき］吾は宗もなく派もなき山僧候よ、偖御僧を見申にさらに人間とハ思ハれず候、いか成人にてましますぞ不審にこそ候へ、

［して］荒愧しや、さこそ人にハミゆるらん、我かく修行に出たるも、未来永々を経て成とも、成仏を得ん其為に、かやうに様をかへ候、哀慈法をたれ給へ、

［わき］もとより法の功力にハ、禽獣虫家鱗魚まで、成仏せずといふ事なし、然らば御身本姓を、懺悔に語給ふべし、

［して上］恥かしながら懺悔して、

［わき］心の雲を晴しつゝ、

［して］胸の月ミん嬉しさよ、

［わき］しかも所は、

［して］富士の山、

［同上］二つあらざる御法には〳〵、誰かハもれん有難や、急ひで懺悔し給へ、

［して上クリ］夫身づからは虫也、

［同］実や蟲類様々有と申せ共、我ハそれにハ引かへて、姿形も恥しや、

［サシ］春過て夏来にけらし草の原に、

[同] すだく虫の音色々に、哥を学び詩を吟じ、心在人の詠の種と成、
[して下] はかなや我は哥も詩も、
[同] 鳴音も知じ白き身の、虫と生れし、愧しや、
[下クセ] 夏草ハ茂りにけりな玉鉾の、道はいづちと知ね共、人松虫の音に立て、尋ね兼たる世語、或ハ山姫の錦織てふ機織の窓の隙さへ小雨ふれど、君蜻蛉の物思ひ、ぬれてや忍ぶ夕暮ハ、簑きて虫のたどると人やいふらん、面はゆ、通ひ〳〵て手枕の、夢や結ばん仮初も、胡蝶のたハれ深草に、夜すがらともす蚊火や、
[上] 戀々て身ハ空蟬のから衣、
[同] 恨ミて胸の蚊遣火のくゆる斗にながらへて、けふ日ぐらしのあすまでと、思ふ心をひを虫の、はかなき虫の身ながらも、をのれ〳〵が音を鳴に、我ハ聲さへ夏虫の、独こがるる妄執を、扶け給へや蜻蛉の、有か無かの此身也、後の世たすけ給へや、
[上] 実や懺悔の物語、聞に付ても哀也、はや〳〵悟給へや、
[して] 悟と未悟と夢と覚るは一つ也、臨終を示し喧給へ、弥陀来迎の上品ハ、十方佛土といへ共、只西方を念ずべし、思へば近き御国也、道をしへんと云ければ、
[してことバ] 疎の御示しや、独来て独帰らん物成を、道教んといふぞ笑しき、
[わきことば] いやとよ、独来て独帰るも迷ひ也、ゆかず帰らぬ、道教けん、
[同下] 是にて得脱し給ふべし、我はお暇申すとて、修行者ハ都へのぼれバ、猶名残在仮初も、師匠の縁も懐しやと、うしろ影を見送りて、泣〻別れ行けり、
[して下] 白身思ふやう、

［同下］〳〵我国々にて数の法を聞といへど、かゝる有難き教へは今ぞ白糸の、乱れ心の来し方も、今は悟の法師ぞ、一念弥陀佛、即滅無量罪、有情非情皆求成佛、五十二類も同姓佛果、なにか、疑ひの有べき、

［して下］有難や有難や、

［同］能々思へば出離を求る、涅槃は我心也、実此夜半も明方の、実此夜半も明方の、夢に夢見る夜ハほの〴〵と東しらミと成にけり

一読、御伽草子『白身坊』と同じ筋である。発心修行の旅に出た虱、富士の麓付近で出会う旅僧という登場者をはじめ、挿入された和歌「面白や、霞の衣ほころひて、雪のはたへの、富士こそハミれ」など、設定・素材は『白身坊』と殆ど共通する。虱と僧のやりとりを描いた作品は、書承・口承の双方を経て、伝えられていたと思われる。[8] 中世『法華経』注釈書が書き留めた虱の歌は、その一端を示すものであった。

四

近世、一人の禅僧が虱を詠み込んだ歌を残した。その人は雲居希庸、『雲居上人往生要歌』（京都大学附属図書館蔵）に興味深い一首が載る。[9]

書写寺の僕の衣の虱とる　むかしの御僧今ぞ恋しき

雲居上人は土佐の出身であり、母が毘沙門堂の付近で休息していた折に誕生したので、終生、観音と毘沙門天を信仰したという。『松島瑞厳中興大悲円満国師雲居和尚年譜』によれば、

後陽成院、天正十八年、庚寅、師九歳、天資夙慧、気宇秀発、不レ喜二戯玩一、群児畏レ之、于時父左京、在二土佐中

村、長宗我部聞レ之、備レ兵襲レ之、仍携師、往二近里宇山太平寺一、頼二之住持真西堂一、已終去レ国、匿二于伊予一、

とあり、九歳で土佐中村の太平寺の住持真西堂に託された。太平寺の開山大仙竺和尚は紀州由良興国寺を開いた覚心の流派の僧侶であったため、十二世環渓和尚（慶安元年寂）以前は由良興国寺派に属していた。雲居和尚は太平寺で少年時代を送り、十五歳の時に剃髪、翌年、師に同道して京都東福寺に入った。また、妙心寺一宙について参禅、三十三歳で印可を受けた。さらに同志と共に諸国修行に出た雲居は、三十七歳の頃から松山城主加藤嘉明・明成父子の帰依を受けた。鈴木正三『驢鞍橋』（万治三年版）にいう。

亦雲居和尚ハ、其比、加藤式部殿ノ帰依僧タリ、或時、大愚和尚、式部殿ヱ見舞ニ至玉、参会ノ度ゴトニ、雲居和尚ヲ御堂坊〳〵ト喚給、雲居和尚、狂言モ一旦社ト云テ、大ニ嗔給、大愚和尚云、イヤ狂言ニ非ズ、堂坊ト云ハレ度モ無ンバ、仏道修行シ給ヘ、或ハ儒書ヲ講ジ、詩ヲ作、歌ヲ読、俗家ニ頭ヲカシゲ廻ルハ、堂坊ニ非ズヤト云給ヘバ、雲居和尚、大ニ非ヲ知、終ニ道ニ入給フ、（下・百四十八）

後水尾天皇の信任をも得た雲居上人は生涯、行脚することが多かった。しかし、寛永十三年（一六三六）八月、伊達政宗・忠宗父子の懇請を受けて松島瑞厳寺に入り、中興第一祖となった。瑞厳寺は円仁開山と伝えられ、古く天台宗に属した。何時の頃からか衰退し、すっかり荒廃したところへ西明寺時頼が尋ね来り、堂宇を再建・寄進した。以来、天台宗から禅宗に改宗し、現在に至るという。境内の法身窟には、時頼毛髪埋葬碑（弘長三年十一月二十二日）、雲居禅師行状碑などがあった。

『雲居上人往生要歌』末尾の一首に目を転じてみたい。

松島やみなとの海面極楽の　池水はおなじ法の陸奥

ここに松島の名が見出される。『雲居上人往生要歌』は、上人が京都から松島へ移ってから執筆された。『松島瑞厳

中興大悲円満国師雲居和尚年譜』は、本書の成立を慶安二年（一六四九）とし、伊達政宗十三回忌に臨んでその室、陽徳夫人のために著されたと記す。

同二年、己丑、師六十八歳、此夏五月、丁二先君政宗卿十三週諱一也、師亦住二此山一十三年也、心欲レ散二於瑞巌会一矣、……陽徳夫人等レ師不レ恒、日進二慕道一、師以下世尊示二韋夫人一勤中説安養浄土之因上、賦二往生要歌百八首一、並記二歴代祖師禅浄一途之書一冊一、説二与夫人一、教下指二帰去此不遠浄土一、称中念無住無念弥陀上、此時有下梓二此要歌一施二於世一者上、叢林廃二行門一之侶、蟻集窃議、于時、有二師門弟賜紫南明一、贖二其板一而和レ偈一炬、

『雲居和尚紀年録』では、「后由是詠道歌百首、其為製也、百八之歌、分之三截、毎截各有六六之歌焉、於一截之初与終、復各有歎佛焉、有回向焉、於歌一首初、先唱六字聖號者六反、百八歌中、都有六百四十六反之聖號、而師坐中唱導、夫人并侍女、圍遶左右、異口同音、相隨而撃節唱和、其聲韻清亮、聞者感発、夫人為之日課送残喘、后師之所到、令四部弟子行此会、師製要歌、其説盈世」とあり、本書が伊達家に重んじられたばかりでなく、世流布の書であった様子が窺われる。けれども、本山妙心寺ではこれを快く思わず、上人の法嗣の一人南明は、『雲居上人往生要歌』の版木を焼くなど妨害した。これを兄弟子にあたる洞水が咎め、論争が展開されたが、明暦二年（一六五六）には本書再版が為された。『雲居和尚紀年録』は「師之要歌、不據典故、多俗説方語之類、或問于師、師云、典故吾還博雅君子、吾要愚夫庸婦之易会、而発善心之一助爾」とも記録している。

先出『雲居上人往生要歌』の虱の歌には、天台寺院「書写寺」が詠み込まれている。何らかの故事を踏まえた詠に相違ない。

書写山円教寺に有縁の僧の中で、第一に想起されるのは開山性空であろう。六浄根を備え、護法童子を使役した『法華経』持者として名高い。

『法華経』「法師功徳品」は六根浄の功徳について詳しく語っている。曰く、『法華経』を受持・読誦・解説・書写する者は、八百の眼の功徳・千二百の耳の功徳・八百の鼻の功徳・千二百の舌の功徳・八百の身の功徳・千二百の意の功徳を得る。

父母所生耳　清浄無濁穢　以此常耳聞　三千世界声　象馬車牛声　鐘鈴螺鼓声　琴瑟箜篌声　簫笛之音声　清浄好歌声　聴之而不著　無數種人声　聞悉能解了　又聞諸天声　微妙之歌音　及聞男女声　童子童女声　山川険谷中　迦陵頻伽声　命命等諸鳥　悉聞其音声　地獄衆苦痛　種種楚毒声　餓鬼飢渇逼　求索飲食声　諸阿修羅等居在大海邊　自共言語時　出于大音声　如是説法者　安住於此間　遥聞是衆声　而不壊耳根　十方世界中　禽獣鳴相呼　其説法之人　於此悉聞之……三千大世界　内外諸音声　下至阿鼻地獄　上至有頂天　皆聞其音声　而不壊耳根　其耳聡利故　悉能分別知　持是法華者　雖未得天耳　但用所生耳　功徳已如是

『一乗拾玉抄』巻六は「法師功徳品」の談義に臨み、聖徳太子説話を耳根浄の例に数えた。八耳の王子の説話は、法師功徳品の文句「無數種人声　聞悉能解了」「其耳聡利故」にいかにも相応しい。(10)

一復次ヨリ下ハ耳根ノ浄也、……又聖徳太子ハ八方ヨリ人ノ申ス事ヲ同時ニ聞テ弁ジ給フ也、仍テ八耳ノ王子ト申也、然ニ四五才ノ御時、親王ノ仰ニ、何ナレバ母ニハ度々相ヒ父ニハ一度モ不相哉ト仰アル時、軈テ脣(ビル)也ト答玉ヘリ、

（『一乗拾玉抄』）

右の説話には「唇の謎」が巧みに活用されている。この謎は『後奈良院御撰何曽』所見の例が著名であるが、ハ行音の音価を示す好例として広く知られることとなった。ハ行音の史的研究は新村出「波行軽唇音沿革考」・「国語に於けるFH両音の過渡期」（『新村出全集』1所収）、橋本進吉「波行子音の変遷について」・「駒のいななき」（『橋本進吉著作集』4）などによってほぼ達成されている。

『一乗拾玉抄』と酷似する伝承は叡山文庫所蔵の資料に掲載される。享徳三年（一四五四）の写本『聖徳太子伝』（叡山文庫蔵）である。[11] 同書には、太子の智恵を童子達が様々に試す場面が詳しく描写され、右と同じ謎が使われている。『一乗拾玉抄』の説話は、永正九年（一五一二）の『體源抄』、永正十三年（一五一六）の『なぞだて』に先駆ける「唇の謎」の古例として貴重であろう。

性空も耳根浄に関する伝説が多い人物であった。豆と豆殻の会話を聞き（『徒然草』）、鳥の声を理解した（『元亨釈書』『天台霞標』ほか）。性空が、樹上で囀る鳥の声を聞き、桜の木を彫って作った如意輪観音像は、円教寺如意輪堂の本尊となった。後に西国三十三所観音霊場の第二十七番に数えられている。この観音像について、『一乗拾玉抄』は、

一草木不成仏ト云ハ尓前ノ心也、金　論云、随縁不變ノ説ハ出レ自レ大教、木石無心ハ生レ自レ小乗レ矣、付レ之草木ニ心ヲ持ツト云證拠ニハ書寫山ノ本尊也、是ハ生キ木ヲ木如意輪也、桜木也、サレバ春ノ花ガ咲ク利生ノ人ハ見之云々

と言及している。[12]

性空伝の中でも、『古事談』所見の逸話は重要と思われる。[13]

此聖人者。得二六根浄一之人也。或時客人来臨。対面之間。懐中ニ蛑蟻ヲトリテ捻ケリ。于時聖人云。イカニサハノミヲバ捻殺サムトシ給ゾトテ大ニ悲嘆給ケリ。客人耻テ退散云々。　（『古事談』第三「性空得六根浄事」）

谷本は「蛑蟻」ではなく、「蟣」と記す。蟣は虱や虱の卵を指し、蟣虱・蟣蝨などの熟語があっていずれも虱を意味する。『法華経直談鈔』では、明らかに性空は「ノミ」ではなく、「シラミ」の言葉を聞いた設定になっている。

又寛平法皇書写ニ御参詣有テ、如意輪堂ニ通夜シテ聖人ノ御説法ヲ聴聞玉フ也、及二深更一聖人ノ被仰様ハ、物

後白川ノ事也

ノ鳴ク声ガ耳ニ障テ不破説法ニセ、是ヲ静メ玉ヘト被レ仰ケレドモ、更ニ鳴ク声不レ聞ヘ、其時法王、何ニ物カ鳴キ候ゾト尋玉ヘバ、其中ニ、年ノ老タル臣家ノ有ルガ、虱ヲ一トラヘテ捻居タリ、此ノ虱ノ鳴ク声ガ聞ヘテ如此被仰タリ、是程ノ事迄デモ耳ニ能ク聞タリ

（巻第六・法師功徳品）

一方、『法華経鷲林拾葉鈔』は性空を六根浄の人として紹介し、「生身ノ普賢ヲ白象室内ニ顕現ス」と伝えた。

播州書寫ノ聖空上人、法華経ヲ一人シテ八万四千部読誦シ玉ヘリ、依其功徳ニ、直拝生身ノ普賢ヲ白象室内ニ顕現ス、得玉ヘリ六根浄ヲ、

（巻二十「法師功徳品」）

性空が神崎の遊女の宿で普賢菩薩にまみえた説話は、周知の伝承である。即ち、上人が夢告に任せて出掛けて行くと、折しも遊宴乱舞たけなわの時であった。鼓を打ちながら歌う長者を合掌しながら見つめていたところ、長者は普賢菩薩と変じた。

類話を所載する資料は枚挙に暇がない。[14] 例えば『古事談』は、

聖人信仰恭敬シテ、拭感涙、開目之時ハ又如レ元爲女人之皃、弾周防室積給、閉眼之時ハ、又現菩薩形演法文、

と描写する。

この説話には、『観普賢菩薩行法経』の影響を読み取ることができると思う。同経によれば、普賢菩薩の乗じた白象の六牙の上には「浴池」があり、蓮華が咲き誇り、そこには「玉女」たちがいて「鼓楽絃歌」を奏している。

於六牙端有六浴池。一一浴池中生十四蓮華。與池正等。其華開敷如天樹王。一一華上有一玉女。顔色紅輝有過天女。手中自然化五箜篌。一一箜篌。有五百樂器以爲眷属。……其象牙上。諸池玉女鼓樂絃歌。其聲微妙。讃歎大乗一實之道。行者見已。歓喜敬禮。

（『観普賢菩薩行法経』）

さらに、経文は「行者は普賢菩薩の説くところの教えを聞き、心眼を以て見るに諸仏の姿をまざまざと目にした」と続く。「閉目則見。開目則失」との表現は、そのまま性空説話と重なり合う。

爾時行者。聞普賢菩薩所説深解義趣。憶持不漸以心眼見東方佛。身黄金色。端嚴微妙見一佛已。復見一佛。如是漸漸。遍見東方一切諸佛。心相利故。遍見十方一切諸佛。見諸佛已。心生歓喜。而作是言。因大乗故。得見大士。因大士力故。得見諸佛。雖見諸佛猶未了了。閉目則見。開目則失。作是語已。五體投地。遍禮十方佛。禮諸佛已。

（『観普賢菩薩行法経』）

普賢菩薩は『法華経』持者を守護する菩薩であり、『法華経』を締め括る「普賢菩薩勧発品」に登場する。[15]『行林抄』「普賢法」を参照すると、「去厭魅野蟲毒」「悪毒縁蟲毒悪獣。聞此呪聲。皆口禁不相悩亂」とある。普賢菩薩も千手観音と同じく、悪虫の害から行者を守護する菩薩であった。

集經第六云。普賢菩薩滅呪。私云。有印呪。可更検之

支波啄決定毘尼波啄断結烏蘇婆啄生盡三

此呪平旦七遍誦。去厭魅野蟲毒。能得身心恵三解脱。生不受生死身。得法身常身。境内外國怨。一切悪人。一切鬼神。一切盗賊。虎狼師子。悪毒縁蟲毒悪獣。聞此呪聲。皆口禁不相悩亂。悪夢災抉鳥鳴百怪。自然消滅。此呪効能説不可盡。

（『行林抄』第三十五「普賢法」）

さらに、性空は六根浄の徳により、生涯、身に虱がつくことはなかった。

日夜ニ法花経ヲ読誦スルニ、初メハ音ニ読ム、後ニハ訓ニ誦ス、舌ニ付テ早キニ依テ也、然ガ訓ニ誦スト云ヘドモ、其レモ吉ク功入テ、人ノ四五枚読ム程ニ、一部ハ誦シ畢ヌ、山野ノ禽獣馴レ睦テ不レ去ズシテ、聖人食ヲ分テ与フ、身ニ蟣虱不近付ズ、

（『今昔物語集』巻第十二「書写山性空聖人語第三十四」）

寛弘四年三月十三日。誦二法華一而寂。年八十。空身無二蟻虱一。胸間雕二弥陀一。

（『元亨釈書』巻第十一・感進三・書写山性空）

翻って、『雲居上人往生要歌』所引の道歌は、時と場所を遥かに隔ててはいるけれども、性空説話の影響下に成立した一首と思う。

五

『一乗拾玉抄』の著者は、巻六「法師功徳品」の談義に臨み、本朝屈指の六根浄の人々を列記した。その中には性空・皇慶・明恵などと共に「五大院」の名が挙げられている。

一日本ニ六根浄ノ人ハ傳教、智證、惠心、五大院、聖空、皇慶、解脱上人、明惠上人、覚禅師也、

（『一乗拾玉抄』）

五大院安然は『童子教』の著者に仮託された天台の高僧であった。『三国伝記』第二十四「五大院安然和尚ノ事」には『童子教』との関係が語られている。

五大院安然和尚は天下無双の碩学であったが、どうしたわけか、極貧の生活に苦しんでいた。せっかく帝が下されようとした絹米銭綿も和尚の手元には届かない。拙い先業を嘆き、和尚は鞍馬寺に入堂した。ところが、なかなか毘沙門天が現れないので、安然はすっかり機嫌を損じた。ややあって姿を現した毘沙門天に向かい、和尚が文句を言ったところ、「和尚には全く福報が無く、三千世界を走り巡って探していたため、遅くなりました」との答えであった。やっと僅かな福力を教えられたので、告に従い、和尚は西京の二坊の麹売りを尋ねた。(16)

仍テ安然彼ノ所ニ尋行キ給フニ、我子ニ文ヲ教テタビ給ヘトテ、小児ヲ御弟子ニ進ラセ、日々粥飯ヲ饗応ス、其時初テ小文ヲ作リ、童子教ト名付テ彼レニ教ヘ給ヒケリ、

続いて、『三国伝記』本文は、安然が餓死したという説を引き、「権化ノ聖者猶然ナリ、況ヤ先業拙キ身ヲヤ」と語り終える。安然の貧窮・餓死説は、天台僧も頻繁に語ったらしく、『渓嵐拾葉集』巻第五十七「五大院挙名事」をはじめ、『法華経鷲林拾葉鈔』『法華経直談鈔』などに書き留められた。

後に、安然は房州の一寺院に有縁の僧として語られるようになった。尾上寛仲氏が「叡山天海蔵義科抄類の構成」（『獅子王教授喜寿記念叡山仏教研究』所収・一九七四年）において引用された「道脇寺」説話である。

所謂「道脇寺本」は妙法院にも数多く伝来し、比叡山正教蔵所蔵本には「道脇寺常住」と表記した例も見出される。道脇寺については現段階では所在突き止め難く、推測するに、近畿地区をさほど隔たらぬ地に実在した寺院であろうか。尾上氏は天海蔵現存・旧蔵の合計五十一点の道脇寺本を列挙、次のように述べている。

道脇寺本の特色は「道脇寺守護」と書いてあることである。其の文字は所謂髯題目を思わせる日蓮宗徒の特色を帯びた筆法によるものである。又「如風於空中一切無障礙」と神力品の偈を書き入れたり、「魔及魔民皆護仏法天台守散」「八魔退敬」の語が書いてある場合もある。「五大院安然旧跡書キ」にもある通り道脇寺本は多数各地に流出していたらしい（其の原因は不明）が、天海蔵には義科抄以外にも道脇寺本は入っている。

（「叡山天海蔵義科抄類の構成」）

「五大院安然旧跡書キ」に関する詳細な紹介・解説は、永井義憲先生「上総に於ける安然の伝説―『安然旧跡書』と『道脇寺由来記』―」（『大妻女子大学文学部紀要』第二十二号・平成二年三月）になされている。永井先生は『安然旧跡書』を享保二十年（一七三五）の書写と推測された。以下、『続天台宗全書』史伝部2所収『安然旧跡書』か

ら重要と思われる記事を抜粋する。

上総国長柄郡山之郷之内ニテ道脇寺安然和尚旧跡古老伝説覚書条々

安然和尚同国同郡道脇（チワキ）氏之由。……附。道脇寺縁起、高師村日蓮宗実相寺ニ有之由。名僧以為所生邑々名モ呼来候由。古より申来候事。

一　安然開基道脇寺。往昔七堂伽藍、百坊と申来。当今在人口明白之事。

一　古今抄物双紙等ニ、道脇寺守護と鼠敢虫刺之除等ト申来候。諸国にて古本等ニ相見申候事。附。然和尚之御廟之麓、鼠坂之義、師平日鼠虫慈愍の徳を感、従高師彼山ニ移候縁説紛失、上人の御書物調度等をあらし候鼠虫を類畜悪て罰し候由申伝。

（『続天台宗全書』史伝部2所収『安然旧跡書』）

即ち、「道脇寺守護」と記せば、聖教類を鼠害・虫害から守ることができた。『渓嵐拾葉集』は安然を上総国出身とする説を載せる。道脇寺の伝承にその名が付会されるについては、必ずしも故なしとしない。同書巻五十七末尾には、

五大院安然先徳御入定所

上総国長柄郡大ケ場村道脇寺　今ハ住僧日蓮宗　ノ北方ニ有之、其辺之村民等毎月二十八日献供云々

右彼国之僧演話ス、宝珠院可透書記ニ被送来

享保二年七月　厳覚

とある。[17] 享保二年（一七一七）には道脇寺付近の村人たちが毎月安然の供養を行っており、こうした信仰が浸透していたことが知られる。

先出『一乗拾玉抄』の記事によれば、五大院安然は性空と等しく六根浄の人であった。当然、身清浄の徳を身に備えていたことになる。高僧安然が「道脇寺守護」の伝承に登場する理由は自ら明らかであろう。

『一乗拾玉抄』巻五末尾の遊紙、および・巻八巻末（後見返し）には「道脇寺」との墨書がある。即ち、『一乗拾玉抄』もまた、「道脇寺本」に数えられるべき一本であった。[18]

注

（1）引用は、『室町時代物語大成』補遺篇二所収の国会図書館本による。なお、堤精二「白身坊」（『文学・語学』第二十九号・昭和三十八年六月号）、藤井隆「『白身坊』の室町古写本について」（『文学・語学』第三十号・昭和三十八年九月号）参照。

（2）虱が富士を仰ぎながら詠んだ歌「富士の霧霞の衣綻びて　雪の肌ぞ顕れにける」は、『天神御詠歌百首』などに類歌「月のきる霞の衣ほころびて　花のはだへぞしろく見えける」が載る。同書は『法華経』二十八品詠を併載し、末尾に、書写山性空が北野に参籠した際、妙法天神経を授けられたと述べている。

本云　此天神経者、於九州安楽寺夏九旬、法華経読誦之間、則此哥詠加自名題妙法天神経給也、其已後、性空上人依御夢想告、即北野詣一七箇日参籠、満夜半剋従御殿裏青衣童子此経持出、授性空上人畢、雖然、在世之間者秘蔵シ玉テ、終不流布也、御入滅後、弟子等弘之若人毎日夜一度誦者、一切諸願成就令如意云々、

私云、於九州安楽寺者僧坊自小島居殿授之　　玄亮

（3）『白身坊』の虱が辞世を詠む場面には『沙石集』とほぼ重なる文句が引かれている。

釈在霊山妙法華　今在西方妙阿弥陀　濁世末代妙観音　三世利益同一体　一念弥陀佛　即滅無量罪　と聞時は八宗九宗の所用心の内にくらからずとて、辞世の哥をよみて、終往生の素懐を遂侍るとかや　（『白身坊』）

古徳口傳云、昔在霊山妙法華　今在西方無量寿　娑婆示現観世音　大悲一体利衆生ト云云、此文意、高野大師法花御開題ノ意ニ符合セリ、　（『沙石集』巻第四（一）「無言上人事」）

「古徳口傳」について、岩波古典文学大系『沙石集』の頭注は未詳とする。『白身坊』『沙石集』の第一句「昔在霊山妙法華」「釈在霊山妙法華」は、「昔」（しゃく）「釈」（しゃく）の音が共通するところから字面が変化したのであろう。文意は『沙石集』の引く形でなけ

れば通じない。口頭を経てこの文句が伝えられていたことが想像される。

(4) 「世の中に」一首は『法華経直談鈔』巻一、「幾度か」一首は『一乗拾玉抄』厳王品・『法華経鷲林拾葉鈔』巻二十七、「つくづくと」一首は『法華経鷲林拾葉鈔』巻三・巻十五、「分上る」一首は『法華経直談鈔』巻四・巻六、『法華経鷲林拾葉鈔』巻七・巻十三・巻十四に引用される。

(5) 『日本方言大辞典』「虱」の項には「ぷっちん」のほかに「まめ　まんみ　ろっぽんあし」などが挙げられている。また、『淮南子』説林訓には「湯沐具而蟣蝨相弔大厦成而燕雀相賀蟣蝨相弔」との表現が見える。これは虱と虱の子が互いに自分の運命を悲しみ合う体を指す。

(6) 千手観音信仰については志田義秀『日本の伝説と童話』(昭和十六年刊)に、「斯の如き観音信仰の中には六観音乃至七観音それぐの信仰も含まれて居り、千手観音の信仰も他の五観音乃至六観音の信仰と共に特殊的信仰の一科を形作つてゐたのである。のみならず、千手観音の信仰は他の観音のそれに比べて最も優勢であつたと思はれるので、西国三十三所霊場の本尊を見ても千手観音が最も多いのである。これは千手観音には観音一般の『観音経』のほかに『千手経』といふ特別の経典があり、且その中の「千手陀羅尼」の功徳といふものも與つて力あつたものと思はれるのである。」と言及されている。また、比叡山内の東塔西谷の千手院には、千手井、別名弁慶水と称する湧き水があった。『平家物語』巻六・入道死去は、この水を熱病に苦しむ清盛に掛けたと語り、『平家女護島』は千手院の水は日本一の冷水であると記した。千手法に、熱病に対する効験が数えられていることに由来するであろう。拙稿「『諸国一見聖物語』攷」(『国語国文』第六十五巻第七号・平成八年七月)参照。

(7) 以下、『行林抄』『渓嵐拾葉集』の引用は、大正新修大蔵経巻七十六巻による。

(8) 古典文庫『未刊謡曲集』二十に翻刻が収められ、その各曲解題には「仮名草子「白身坊」……は虱が僧となって鎌倉建長寺を出て駿河の興津まで下る道中記であるが、本曲はこの仮名草子と邯鄲とに啓示されて作られた。近世初期から中期頃にかけての作であろう」と述べられている。

(9) 平野宗浄『雲居和尚年譜』(近世禅僧伝3・思文閣出版・昭和五十八年)参照。

(10) 『一乗拾玉抄』巻七「薬王菩薩本事品」は、

太子ハ要明天皇ノ御子也、八耳王子ト申ス故ハ大臣ガ八人八方ニ居ラ同時ニ申ス事ヲ同時ニ御答アル故也、又厩ノ王子トモ申ス、是ハ馬屋ニテ御誕生有ル故也、南岳ノ後誕也、本地ハ救世観音也、是如意輪観音也、一日羅聖人唐土ヨリ太子ヲ為解見申越玉フ、無シテ御対面、七才ノ御時、童子ヲ十人同ジ衣裳ニ出立セテ何レ太子トモ見不ル分タ様ニシテ只遊バセ

申ス時、日羅ハ権者ナル故ニ聽テ太子ヲ見知テ……

とも記す。

(11) 鈴木博『室町時代語論考』(清文堂・昭和五十九月十一年刊)・高橋貞一「太子伝と平家物語」(『高橋貞一国文学論集』所収)参照。

(12) 『法華経直談鈔』は、如意輪観音にまつわる説話に和泉式部を登場させている。即ち、一条院の御宇、上東門院が性空の高名を聞き、輿七丁を従えて上人を尋ねて来た。上人はこれを予見し、「今日は鬼が七人来るだろう。もし私を尋ねて来たら、下国したと答えよ」と僧たちに言い含め、寺の奥に身を潜めていた。一行の中には和泉式部がいた。上人が対面しないので、「冥きより冥き道にぞいりぬべき　はるかに照らせ山の端の月」と詠じた。持仏堂にいた性空はこれを聞き付けて心を動かされ、一行を出迎え、法華一部の大綱を説いて聞かせた。

又泉式部モ草木モ可ㇾ成佛ス説玉フヲ聞テ、本尊ノ観世音ハ生(イキ)木ノ櫻ニテ御座ス事ヲ思ヒ合シテヨメリ、

草モ木モ佛ニナルト説ク法リノ　マココトアラワス山櫻カナ〳〵　(金台院本『法華経直談鈔』第三「化城喩品」)

この一首は「性空上人伝記遺続集」(『続天台宗全書』史伝2所収)にも見出すことができる。

如意輪堂造立時異鳥鳴謌

ナニモミナイトハヌ山ノ木草ニハ　阿耨菩提ノ花ゾサクベキ

尾長鳥鳴声詠替詠謌

春秋トツトメヲコナフ山ノ人　ハヤヨミナラヘヒトツミノリヲ

如意輪堂打札面書謌

草木ミナ仏ニ成ルトトクノリノ　マコトアラハス山桜哉

『法華経直談鈔』が書き留めた和泉式部の詠は、性空・観音説話とともに、語り継がれたものであろう。性空と和泉式部との説話は、『一乗拾玉抄』も簡略に掲載する。

物語云、一乗院時、泉式部トテ遊女アリ、書寫ノ性空上人ヘ参リ上人ニ奉値可成仏云テ参ルニ上人無シ御対面、式部申様ハ、上人御対面無ハ我等女人ナル故也ト云テ哥ヲ捧グル也、

冥キヨリ冥キ道ニゾ入リヌベシ　ハルカニ照セ山ノハノ月

上人難有ト思召シテ御対面アリ、其時式部尋申様ハ、女人ノ即身成仏ハ法花ハ何ノ文デ候哉ト、上人答テ云ク、無二亦無

三也云々、式部哥ニ云、無ニ無キ三法リト聞ク時ハ五ツノ障リアラジトゾ思フ云々、（『一乗拾玉抄』巻三・化城譬品）

『円教寺文書』（『姫路市史』所収）は、書写山内に和泉式部の塔ありと記している。

なお、書写山は禅密寺院であった上野国世良田長楽寺とも関連を有していた。即ち、世良田の長老月船は、書写山内に置き去りにされた童子であったという。世良田に関わる笑話は『一乗拾玉抄』に見え、後に天海が入寺した大刹としても重要である。拙稿「溯『醒睡笑』」（『成城文藝』第一三九号・平成四年七月）・「法華経注―石ヲ聚メテ玉ヲ取ル」（『中世の知と学〈注釈〉を読む』所収・森話社、一九九七年）参照。

一　正覚院造立事

右当院者、洛陽東福寺ノ長老上野州世羅田寺ノ前住、月船和尚ノ塔頭也、彼長老所生者、当国賀古郡ノ人也、年歯十歳計リ之時、当山遍照院ノ中門之遍捨置時、坊主浄密房静快、早朝ニ見之、容儀衣裳尋常ノ少童也、委尋事ノ子細〃要、有様尓々ト答テ云、乳母居之云云、依之偏ニ扶持之ヲ、雖経年月ヲ更ニ尋来人無之、心操幽玄ニシテ利根聡敏也、雖然出家得度之後、依俗諦之不涯ニ、遂ニ離レ山ヲ、旧里当国都田寺ニ住、其後到リ上野国ニ着シテ黒衣ヲ数十年之間、学ビ真言ヲ窮奥旨ヲ、而為テ世羅田東福寺両寺ノ長老ト、公家武家之崇敬無双也、……（『裙拾集』）

（13）「性空上人伝記遺続集」も同話を記載する。

上人徳行奇特事

第八徳ノ中ニ聞ト蟣蝨声者、或人与上人対面之時ニ於懐中ニ取テ蝨、即欲ス捻殺ト、上人告テ彼□ニ言ク、汝ガ手ノ中ノ蝨ニ有哀傷声、汝可放ス之、□隠密ス、成テ奇異ノ思彼ノ人放ト之云々、此事裁タリ古事談ニ、

また、『法華経直談鈔』譬喩品の談義には、書写山極楽房に住する慈悲深い僧の説話が収められている。その筋は『雲居上人往生要歌』と似る。

（14）『正章千句』第十の句は諸書に見える性空説話を踏まえて詠まれた。

普賢菩薩をおがむ春の日
性空はかすむまぶたを引ふたぎ
夜すがら大豆のにえをとやきく

（古典俳文学大系所収）

（15）『法華経』の持経者性空は、護法童子を使役していた。『一乗拾玉抄』は護法童子を使った僧侶に「上空上人」「谷ノアザリ皇慶」を挙げる。

一天諸童子ニ付テ、唐土ニ定真禅師ト云人ハ常住法花ヲ讀ミ玉フニ、天人來テ無窮ノ食ヲ奉リ又花ヲ摘水ヲ汲ムト云々、又上空上人ハ乙護法ヲ仕玉フ也、是モ法花ノ徳也、乙護法ト者羽天王ノ事也、或ハ白ラヒゲノ大明神也、或ハ備前ノ國ノセムリ山ノ明神トモ云也、又谷ノアザリ皇慶モ乙護法ヲ仕玉フ也、何レモ法花ノ行人也、

性空に使えていた童子は乙・若の二人であったが、ある日、乙護法は人を殺めてしまった。性空の逆鱗に触れ、童子は皇慶を頼った（『元享釈書』巻五「叡山皇慶」）。皇慶は性空の弟子であり、甥にあたる。

薄暮ニ童子来。身体偉壮。慶怪而問。汝何人。対曰。多時侍書写性空上人。曾　役兪上人上供。我不耐忿。以拳加頭。其人即死。上人愍厂駆我去。故投師焉。慶與飲食。童子拱曰。願加ニ印呪ヲ。易受耳。慶使イス童子数百里外。不半時復サフ命。

この説話は、変容を遂げて、『法華経直談鈔』に収録された。曰く、性空から、乙・若二人の童子が皇慶のもとに遣わされた。乙護法だけが辛抱強く奉公していたが、はずみで人を打ち殺してしまう。

サテ山門東塔南谷ノ井ノ房皇慶ト云ハ、上人ノ甥ナガラ弟子也、谷ノ阿闍梨トモ云也、而ルニ、上人ノ方ヨリ二人ノ童子ヲ遣シテ、被ルニ奉公サセ、若護法ハ廣藝ノキツサニ逃テ書寫ヘ歸ル也、乙護法一人有テ奉公申ス也、袈裟ヲアラハセラル、ニ、日本ニハ可洗池ケ無シトテ、天竺ノ無熱池ニテ洗テ歸ル也、其ノ袈裟ヲシボリテホスニ、シルノシタ、リガ井ト成テ今ニ有ル故ニ井ノ房ト云也、而ルニ井ノハタニ小法師共ガ集テ膝打ヒザト云事ヲスルニ、乙護法ヲモ交テ膝打ヒザヲスルニ、力ガツヨサニ膝ヒザヲ打トテ人ヲハリ殺ス也、其時廣藝ノ被仰様ハ、護法天童ナンド、云ハ、以慈悲ヲ可為本ト處ニ、還テ殺生スル事ハ由セ事也トテ追出玉フ也、乙護法ハ廣藝ノ形見ニセントテ、中堂ノ内陣ヘハシリ入テ錫杖ヲ取テ行ク處ヲ、十二神ノ中ノ金ヒラ神追懸ケテ取リ返ス時、輪計リ取テ逃タリ、是ヲ持テ津ノ国箕ノ面ノ竜穴ト云處ニ行タリ、是ハ弁才天ノ浄土也、弁才天ノ童子ニ、徳善大王ト云童子見テ之ヲ、汝ガ持タル物ハ何ゾト問ヘバ、錫杖ノ輪也ト云也、是ハ汝ガ可持キツト非レ物ニハニ云テ、ソコヲモ追出ル、也、夫ヨリ九州セムリ山ニ住也、而ルニ廣藝書寫ヘ通カヨフテ學問シテ歸玉フニ、キラ、坂ニテコロビ玉フ時、乙護法ガ居タラバト仰ケレバ、是ニ候トテ、廣藝ヲ引起タリ、何トシテ来テ有ルゾト問玉ヘバ、隨テ影ニ常ニ候ガ、乙ト被仰間ダ、御赦免歟ト思テ答タリト申ス也、是天童給仕也、

（『法華経直談鈔』巻第五・安楽行品）

文中、皇慶の護法童子が箕面山に至ったとある点に注目しておきたい。箕面山瀧安寺は摂津国豊能郡箕面村平尾にあり、天台宗寺門派に属す。白鳳二十一年、役小角が当地の三つの滝を巡り、頂上の竜穴において、弁才天女などに会った。そこで草庵

を結び、本尊に龍樹菩薩・弁才天女像を安置したという。古来、竹生島・江島・厳島とともに本朝四弁天と称せられる。まさしく、弁才天の浄土であった。他方、真名本『江島縁起』は、皇慶を同縁起の著者であると記している。『法華経直談鈔』の皇慶説話が成立する背景には、こうした事実が影響したと考えられる。

右縁起、延暦寺阿闍梨傳燈大法師位皇慶、俗姓橘氏、贈中納言廣相卿曾孫也、生而神靈、幼而能言、七歳初登叡山、住於東塔阿弥陀房、……於茲爲顕示神威於末代利益萬民、故訪問慈覺大師之舊儀、遍尋諸神之遺跡披古記、成此縁起、于時春秋七十七。永承二年己亥七月廿六日丹波國於池上房所撰記也、……　（神道大系神社編十六所収・真名本『江島縁起』）

拙稿「『二乗拾玉抄』所引和歌攷」（『国文学研究資料館紀要』第二十三号所収）参照。

(16)　岡見正雄先生『室町の文学の世界』（岩波書店・一九九六年刊）所収「第五章　面白の花の都や」には、洛中を往来していた物売りの中に、「西京の麹売り」がいたことが指摘されている。

(17)　「厳覚」は『猿鹿懺悔物語』（早稲田大学図書館蔵）などをも書写した学僧である。

(18)　平成二年冬、故福恵英善先生に、『二乗拾玉抄』所載の道脇寺についてお伺いしたところ、関連資料として『安然和尚旧跡書』の存在を御教示賜わった。